



Title	G.Th. リートフェルトの商業空間およびインテリアについて
Author(s)	佐々木, 一泰
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103735">https://doi.org/10.18910/103735</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## G.Th. リートフェルトの商業空間およびインテリアについて

佐々木 一泰 滋賀県立大学

はじめに

G.Th. リートフェルト (Geritt Thomas Rietveld 以下リートフェルト, 1888-1964) は, これまで家具や建築において多く論じられてきたが, 生涯にわたって商業空間を手掛けていたことは, あまり知られていない。筆者はこれまで, リートフェルトの建築構法と椅子を中心とした家具について研究を進めてきたが, 先行研究では商業空間について言及されたものは一部に留まっており, その全体像も明らかにされていない。本発表ではユトレヒト中央美術館 (Centrall Museum Utrecht) が管理するリートフェルト・シュレーダー・アーカイブ内にある図面や写真資料を中心に調査を行い商業空間のリストを作成した。

商業空間の分類

リートフェルトが未実施を含め手掛けた全 681 作品から, 実施された商業空間は 61 作品確認された。しかし, 商業空間の表記や資料が完全ではなく全体数は前後する可能性があり, 今後オランダ本国でより詳細な調査を行う予定である。商業空間の対象は非住宅のものとし, 第二次世界大戦前に 26 件, 戦後に 35 件が確認できた。これはリートフェルトによる建築作品は, 住宅が戦前に 28 件, 戦後に 62 件, 非住宅建築が 22 件 (すべて戦後) 確認でき, 建築 112 件に対し商業空間 61 件から, リートフェルトの仕事で商業空間が大きな割合を占めていた事が推察される。

商業空間の分類として, ショップ (物販店舗) は生涯通じて多く, 約 3 割を占める傾向がみられ

た。特に銀器工場の製図工を行っていたことが影響したのか, ジュエリーショップの仕事がキャリアの初期に 3 件と多く, その他靴や革製品, インテリア家具などが続く。また世界恐慌から第二次世界大戦後にかけては, オフィスやショールーム, 医療関係 (クリニックなど) の仕事が増える傾向がみられた。また戦後は展示会などの仕事が増える傾向がみられた。一方飲食店舗は少なく 2 件に留まっており, ディスプレイデザインが重視された仕事が多い傾向がみられた。

世界恐慌前の商業空間の傾向

リートフェルトが最初に手掛けた店舗が, 彼が製図工として勤めていたベヘール銀器工房 (Cornelis Begeer, 1919, Utrecht) のファサードデザインである。素材はコンクリートを使用し, 既存図が不明なため, 間口の変更などを行ったかは不明である。2025 年度現在サインと上部レリーフの一部は撤去されているが, 建具を含めたファサードデザインは現存している。

また革製品の店舗 (E.Wessels en Zoon, 1924, Utrecht) では, 既存図より煉瓦壁を撤去し, 鉄骨の梁と柱で補強したのち, 鉄骨フレームのガラスショーケースが挿入されていることが確認できる。2025 年現在ファサードの大部分は現存している。またこのデザインは, 日本においても現代建築大観 (岸田日出刀他編, 十輯和蘭篇, 構成社書房, 昭和 5 年 (1930 年)) でも紹介されている。

傾向としてはインテリアに留まらず建築技術を用いたファサードデザインが特徴ともいえる。

## 世界恐慌前のドイツでの商業空間

リートフェルトは隣国ドイツでも商業空間の仕事を行っている。ドイツ西部にあたるウェッセル(Wesel)では、マーガレット・ザウディ(Margarete Brandenstein-Zaudy, 1881-1930)が夫婦で経営したインテリアショップであるザウディ(Zaudy, 1928, Wesel, Germany)があり、ファサード改修はリートフェルトが行い、インテリアはザウディ自身が手掛け、内照式のロゴデザインやガラスのカーテンウォールといった現代にも共通する要素がみられた。しかし1938年の水晶の夜(Kristallnacht)とその後の空襲で破壊され、建物を含め現存していない。また近隣の街クレーフ(kleve)でも2件の商業空間が確認できる。

## 世界恐慌、第二次世界大戦にかけた商業空間

デ・ステイル以降から世界恐慌を経る第二次世界大戦にかけて、ショップに加えショールームの仕事が現れる。

はじめてリートフェルトの家具を大量生産したメッツ社(Metz& Co.)では、リートフェルトはショールームに加え、ファサードやロゴデザインも手掛けている。1933年にはアムステルダム石造・煉瓦造5階建建物屋上に円筒形のショールーム、キューポラ(Cupola)がつくられた。このショールームは鉄骨のフレームと木造軸組構法による屋根による軽量化を図った構造が特徴である。

また、建材のショールームも手掛けている。ドリエッセン・タイルショップ(Driessen's tile shop, 1939, Arnhem)は第二次世界大戦開戦の年につくられたタイルメーカーのショールームであり、このメーカーとの仕事は戦後も継続することとなる。世界恐慌の影響か、非常に簡素なつくりの一方、タイルのモジュールを床と天井に展開する手法は、「節制の富」と評されたリートフェルトらしい装飾が少なく効果的なデザインとなっている。

ショップやショールーム以外にも、リートフェルトは映画館の改修を2件行っている。そのひと

つであるフリーバーグ・シネマ(Vreeburg Cinema, 1934-1936, Utrecht)は、リートフェルトがオランダ映画連盟(De Nederlandsche Filmliga)のメンバーでもあったことから、この改修を行ったとされ、シュレーダー邸同様シュレーダー夫人もデザインに参加したとされる。この建物のユニークな点は、映画館の屋上に2つのアパートメントがつくられ、その1室にリートフェルトの家族が住んだことである。1974年まで映画館は存続し、現在はアパレル店舗に入れ替わっているが、ファサードデザインは僅かに残っている。

## 第二次世界大戦後の商業空間の傾向

戦後は展示会の仕事が増加する傾向がみられた。それまでの家具デザインに加え、グラフィックのデザインも手掛けていたリートフェルトにとって、グラフィックと組み合わせられた展示会の仕事とは相性が良かったと考えられる。

また家具と床素材を用いた色彩の組み合わせの例として、パリ・ユネスコ本部プレスルーム(1957-1958)がある。オランダから国家寄贈されたプレスルームであるが、資料としては4枚の着色された白黒写真が残るのみである。1982年に解体された際、家具類はオランダ文化遺産局に返還されたが、全体像が不明な点も多く、現在バーチャル空間での復元プロジェクトがアムステルダム大学などで行われている。

## 結論

リートフェルトは商業空間のデザインに対して、初期は建築的な解決方法を改装事案に導入することで、インテリアの制約を超える試みがなされた。その後、住宅の設計依頼が増えた一方、商業空間では簡素な制作手法への試みにシフトし、家具と建築の中間的手法を試みている。戦後はグラフィックデザインとの親和性も高かったことから、展示会などのテンポラリーな空間への対応も可能であったともいえる。